〔東京家政大学研究紀要　第26集，p. 149～155，1986〕

言語の発達の遅れた子どもについて

鈴　木　裕　子

（昭和60年9月30日受理）

A Study on a Handicapped Child Who is Behind in Language Development

Yuuko SUZUKI

(Received September 30, 1985)

はじめに

子どもの育ちゆく姿をみることは，喜びでもあり不安を伴うものでもある．現代のように，子どもの発達についての情報が過剰な時代は，子どもの理解の手がかりを得やすいという多大なメリットを生ずるとともに，一成長過程の停滞が必要以上に母親にとっては不安材料として受けとられていることもまた事実であろう．

様々な情報に翻弄され，日常の子どもとの対応が殺那的になり，それが子どもの成長発達にマイナスになっているケースのあることも否めない．また，個性尊重ということを過大解釈し，何でも個人差の範囲として受けとめ，初期の適切な時期に十分な介助をほどこさずに問題をさらに拡げていっている場合も認められる．

いづれにおいても，子どものよりよい発達を目指したことに端を発するのであるが，子育ての難しさを痛感させられる現象である．

さて，前報においては，このような結果から生ずる子どもの問題について，母親の主訴をもとに若干の考察を試みたが，本報ではその中でも特に母親が問題としてとらえている割合の高い，言語に関することがらについていま少し考察を試みていくとともに，具体的な一つの事例をとりあげ，合わせて考察をすすめていくものである．

ことばのもつ意味について

他の動物とは質を異にした人間のもつ特有なものとして言語活動が認められる．人間以外の動物においても，いわゆる交信行動としての言語が認められることは，動物生態学や心理学等の領域において報告されており，言語学習の可能性も動物によっては可能であるということも言われている．

しかし，人間個有の文化という視点からとらえると，人間が言語をもつことの意味の重さを痛感せざるをえないのではないだろうか．どのような地域に生活している種族であっても，その生活圏において共通の言語体系を持ち，文化を築いているのである．2足歩行と手の使用が活動の拡大と豊かさをもたらすことと合わせて，言語は人間を人間として存在させうる重要な要因の一つであると言っても過言ではないと考えられる．

生活していくうえにも必要不可欠な言語は，意志や感情を伝えあい，経験の拡大，学習・知識の習得に多大な役割を任っているのである．

子どもはいづれもまず，その誕生した文化圏の言語を発達に応じて徐々に習得していくのである．それと同時にそこに形成されている生活様式，文化をも吸収していく．しかし，言語そのものは身体発育とは異なり，自然発生的に成熟によって出現するという性質のものでなく，環境との関わりの中で，その過程は様々な経過を辿っていくものである．

換言すればそれだけ環境の影響を受けやすい側面であり，関わりの重要性が示唆されるのである．

しかし，この関わりということが実は非常に抽象的で複雑なことである．関わりと一言で言っても，それが単に多ければよいという単純なものではない．過剰な刺激や過保護な状態で，何でも要求が満たされてしまう環境におかれている子どもは，言語使用の必要性が低く，それゆえに発達がとどこおりがちである．一方逆に関わり

児童学科

が少なく，生活環境が不十分で，言語刺激の乏しい場合も言語発達の遅滞が生ずる．

さらに単に量だけの問題でなく，発達を助長する働きかけや子どもの要求に応じた内容での対応をしていくという，質の問題も合わせて問われてくるのである．

また，主体者としての子ども自身の特性もそこに加味されるのである．つまり泣くことが少い，抱かれることを好まないといった社会的行動の乏しい子どもの場合には，必然的に周囲からの働きかけも少なくなりがちであり，相互交渉による言語発達の機会は少なくならざるを得ないのである．

このように，子ども・養育者・言語環境…といった諸々の条件の交錯する生活環境のもとで，相互のやりとりの経験を積み重ね，要求を表現する力や自分の気持を表出する力のバランスがとれて発達していくことが望ましく，そのための介助が必要不可欠なことになるのである．

年少の場合には，言語発達に関する機能はおおむね家庭にゆだねられていることが多い．言語活動が模倣からはじまるということから考えても，モデルとなる人の役割は重要であり，言語発達に関する家庭や主たる養育者の役割は大であるといえる．

発達途上の子どもの言語は，内容・構文の面からいっても稚出であるが，大脳の発達や発声器官の成熟という生理的条件，そして話しかけややりとり関係が充実した環境の成立が導因となり，言語を使用することによってより一層その充実がはかられていくことを理解することが必要である．そして，適格に子どもの要求を察知し，その時々の子どものニードに則した働きかけが大切である．調和のとれた発達がのぞめるよう子どもの生活環境を整えていくことが重要なことである．

以上のように，言語機能の成熟，環境上の諸条件の充足などの要因が統合的に交錯して言語発達は促されていくのであるが，いづれかの測面に問題があり，発達上の滞りを呈する子どももみられる．

言語の遅れは様々な原因によって生ずるが，構音障害難聴・吃音・口蓋裂などは，医学的な対処や特別な訓練によって問題解決がはかられる．また知的な遅れや脳性マヒなどの他の障害と複合して顕在してくる場合には，個人個人の発達の様相に照らして訓練指導等が必要となる．そして最近の目立った傾向としては，言語の遅れが顕著な症状としてとらえられるが，情緒的な人との関わりに困難をきたす子どもたちがあげられる．いわゆる自閉症や情緒障害といわれる子ども達の特性を合わせもっている子ども達で，諸側面の発達のバランスを崩している子ども達である．都市化や文明化がすすんできたことや，知育主導型の育児行動が優先されていることなど，その原因は種々考えられる．共通した行動としては，乳児期にあまり泣かない，おとなしくて手がかからない，あやしても反応が少ない，指さし行動がみられない，あるいは極端に遅い，コミュニケートしにくいなどの特徴がみられる．

このような一群の子どもに対しては，主訴に対する対処療法的な言語を抜き出した指導は，旧々にして逆効果を生むことが多く，子どものコミュニケーションの発達という視点からとらえた子どもへの指導が主流となっていく．つまり脱線している前段階に戻って，その段階の行動が十分に体得されるまで待ち，次段階へと移行できるように援助することが問題解決をはかることになっていくのである．本来子どもは，自分の力で自分が生活しやすいように環境を変えていくのである．時にはそれが反抗・反発というかたちで具現される．しかし，このような子ども達はなかなかその力が発揮されてこないのである。

このようなタイプの子どもに出合った時には，ひとりひとりの個有な子どもの理解につとめ，主訴より症状の示す問題を理解し，行動をみることによって問題をみつけ，現状を把握してその子に合った指導の計画，見通しをたてることが必要であると考える．

子どもの生活史を掘りおこし，子どもをとりまく環境上の問題等を詳細に分析検討して，子どもの埋れた言語活動を十分に顕在化させ，子ども自身が言語を主体的に活用していけるよう援助することが，その発達を助長することになるのである．

原因は様々であっても，言語の遅れが第一義的な問題として浮上してくる場合が多く，その背景には種々の問題が含まれており，簡単には問題解決がはかられていかないのが現状であろうと推察される．

そこで次に，言語の発達の遅れた子どもの一事例をもとに，本ケースの経過を辿りながら，その成長の過程をみつめてみよう．

事例研究

氏名：　Y・U　（男児　初回面接時3歳2カ月）
家族構成：　父・母・兄・Y君

1. 生育歴

Y君は胎生期の異常はなく，妊娠39週で誕生する．生下時体重は3500gであり，羊水混濁（＋）はみられたが正常分娩であった．両親・親族に遺伝的な病気はない．

首の坐りは4カ月，始歩は14カ月であり，その他極立った遅れは認められなかった．

乳児期はおとなしく，手がかからない子で育てやすかった．ミルクを飲んではよく眠り，泣くことも少なく，母親が時間を見計らって授乳やオムツ交替等の世話をすれば静かにしており，人から「赤ちゃんがいるように思えない．」といわれることがよくあった．

抱かれることは好まず，抱き上げると不快な様子を示し泣くことが多かった．あやしても兄の時のような喜ぶ反応が少なく，静かにしていることを好む子だと思って必要な世話をする程度の関わりで，ほとんど一人で寝かせておくことが多かった．

顕著な人みしりはみられず，母でも他の人でも同じように反応していた．

言語発達の面をみると，喃語が6カ月頃からみられた．1歳6カ月になっても有意味語は出現していないが，兄も話し始めが遅かったので特に気にかけず，そのうちに話すだろうと楽観視していた．2歳8カ月頃になると有意味語の出現が認められ，「パン」「ギューギュー（牛乳）」など2～3語言い出した．しかしその後，語彙の量的な増加は認められず，母親も不安が高まり，3歳2カ月の時点で「言葉の発達が遅い」ことを主訴として相談室を訪ずれた．

要求行動としては母親の手をひいて目的の場所まで行き，「ンーンー」（「とって」や「ちょうだい」の意味）と言うことが多い．

1歳6カ月頃に風邪をひいて高熱を出し，ひきつけを起したが，脳波は異常なく，単純な熱性けいれんと診断された．

初回面接に訪れた時には，若干単語の数，種類は増えてきていた．「パン」「ギューギュー」のほか，「イタダキマシュ（ス）」「パンツ」「バイバイ」「イコー」…等が認められ，あとは「ジュジュジュ…」と声を出していることが多い．

母親の言うことや簡単な指示は理解し行動できる．

ゆったりと落着いて話を聞こうとすることが少く，母親でも他の人でも，話しかけても無視することがある．

電車が好きで，よく踏み切りのところに見に行く．絵本も電車の本だけを好んでみる．他の絵本をみせようとすると，すっといなくなり，電車の本を探して一人でみている．

午前中はよく近くの公園に行き，遊びに来ている同じ年齢の子ども4～5人の近くで遊んでいる．最近，遊んでいる時に，他の子におもちゃをとられ，母親のところに泣いて訴えてくることがあった．母親が仲立ちをして遊具を返してもらうと，また母親には無関心で遊び始める．家庭では入浴時や絵本などで単語を覚えさせるようにしている．

2. 初回時の様子

室内にあるミニカーを目ざとくみつけ，一つづつ順番に並べはじめる．時々「ジュジュジュ…」と何か話しているような声を出す．相談員と母親が話しているのにはほとんど無関心であるが，チラっと気にしてみることもある．「Yちゃん」と呼びかけても応じず，自動車を並べ続けている．母親に同じように呼びかけてもらうと，チラっと母親をみるが，すぐにまた並べる作業を続ける．

初回の面接では，母親は3歳になって周りの子どもと比べ，言葉が遅れていることが気になり始めたようである．現在は遅れを取り戻そうと言葉を教えたり，一言でも多くしゃべらせようと努力している様子が伺がえる．子どもの興味やその時の状況，理解の程度に関わりなく，

一方的に母親の方から手あたりしだいに言語化し，少しでも多く単語を覚え込ませようとしている傾向がある．関連性のない散発的な刺激に，むしろ子どもが戸惑っていると思われる場合も多々認められる．

また，日常みられる行動の特徴として，視線が合いにくい，指さしがみられない，手や服をひっぱって要求を満たそうとすることが多い，呼んでもなかなか振り向かない，乗り物（電車，車）に固執する，身体接触を好まない，人の区別が十分でない，など，対人行動上の問題が認められるが，母親は問題として認識していない．

以上の様子と母親からの話を総合して考えると，子どもの人や物への関心が薄いという気質と，初期の対人関係において人への興味，関心が育つ土壌が稀薄であり，身体接触を基盤とした母親との信頼関係が十分に確立されていないことがうかがえる．

さらに，急激な母親からの一方的，散発的な発語に子どもが困惑していることも認められる．言語発達を助長

するためには，子ども自身の言語に対する内的，外的な構えを確立させると共に，母親を含めた環境状況を再構成することが必要であると考えられる．例えば，母親には強制的に言葉だけを教え込もうとすることは避け，子どもの志向性にそった具体的レベルでの言葉の呈示，合わせて人や物への関心の強化をはかるため，身体接融も含めて，本児をできるだけ受容し，母と子の信頼関係の基盤を確立していくことを第一義と考え，心がけてもらうようにした．

3. 経過

第2回面接（3歳3カ月）

母親の関わり方の変化とともに，子どもも最近自分から話しかけてきたり，兄の真似をして話すようになってきた．言彙数もわずかではあるが増えてきている．

父，母，兄，その他の人の区別もできるようになってきている．相変らず，汽車や自動車の本しか開かないが，以前のようにだまってじっとみているのではなく，「キシャ」「デンシャ」「ジトーシャ」などと指さして知らせてきたり，確認したりしている．最近は電話にも興味を示し始めている．食事の時も，今まで一人で黙々と食べていたのが，母親の膝に坐りにきて抱かれて食べたりする．甘えてくることもみられ，抱っこやおんぶを要求するようになった．

面接室にも前回より子どもらしい表情で入ってくる．電話をみつけていじり出す，「ルルルル，ルルル…」と電話の擬音を発する．「モシモシ，ハイ，ジュジュジュ」等話しているつもりの行動がみられる．同室の女児が受話器を取り上げると「モシモチ，ウン，ウン，バイバイ」など，相手の様子をうかがいながら話している．相手が受話器をとると自分もとりあげ，「モッシッシ…」と始まる．相手の存在を認めた行動や言語の表出が認められる．電車や車など乗りものについてのこだわりはまだ強く，本など一緒にみていてもバスや電車など気に入っているものは指さして，「キシャ」「バス」等の反応があるが他には興味を示さず，自分のペースで頁をめくっていくことが多い．

母親の関わり方の変化と，子ども自身の成長の時期とが相まって効果的な結果を生んだと言える．指さしなど前言語的表現も定着してきており，表出言語への準備がすすめられてきていることが認められる．合わせて，人との関わりにおいても，甘えることや要求が出せるようになり，母親との関係も愛着に基づいたものに変容していきつつある過程であることがうかがえる．また，相手の行動を認めながら自分が行動するというやりとり，相互交渉の芽ばえも認められた．

第3回面接（3歳6カ月）

言葉の数はだいぶ増えてきている．物の名称だけでなく，「カシテ」「コッチ，コッチ」等話す．会話はまだ不十分であるが，話そうとする気持は十分伝ってくる．「自動車」「電車」と言うと反駁して「ジドーシャ」「デンシャ」と言うことが多い，言葉だけでなく，動作や人の真似をすることが多くなってきている．要求も色々出てきている．「ドーエモン（ドうエモンをかいて）」と紙とエンピツを持ってきたりする．

面接室では同室の子どもと同じように自動車に乗って遊んだり，遊具の貸借りをしたり，一緒に絵本をみたりと，物を媒介として人と一緒に行動することや，人への関心が強くなっていることがうかがえる．問いかけには何を聞いても「ウン」と答え，自動車や電車のことを答える時とかなり応じ方が異なる．依然としてマイペースなところはあるが，母親の姿を遊びながら確認したり，母親の存在を認める行動も増えてきている．

現在までに母親の存在が以前とは異なる存在として根づいてきていることや，人との関わりがいく分発展性をもったものになってきていることが認められる．それに比して言語面の伸展が期待するほどのぞめていない．子どもの全体像を掌握することや，問題をより具体的に把握することが必要と思われ，乳幼児精神発達検査を実施し，情報を得ることにした．

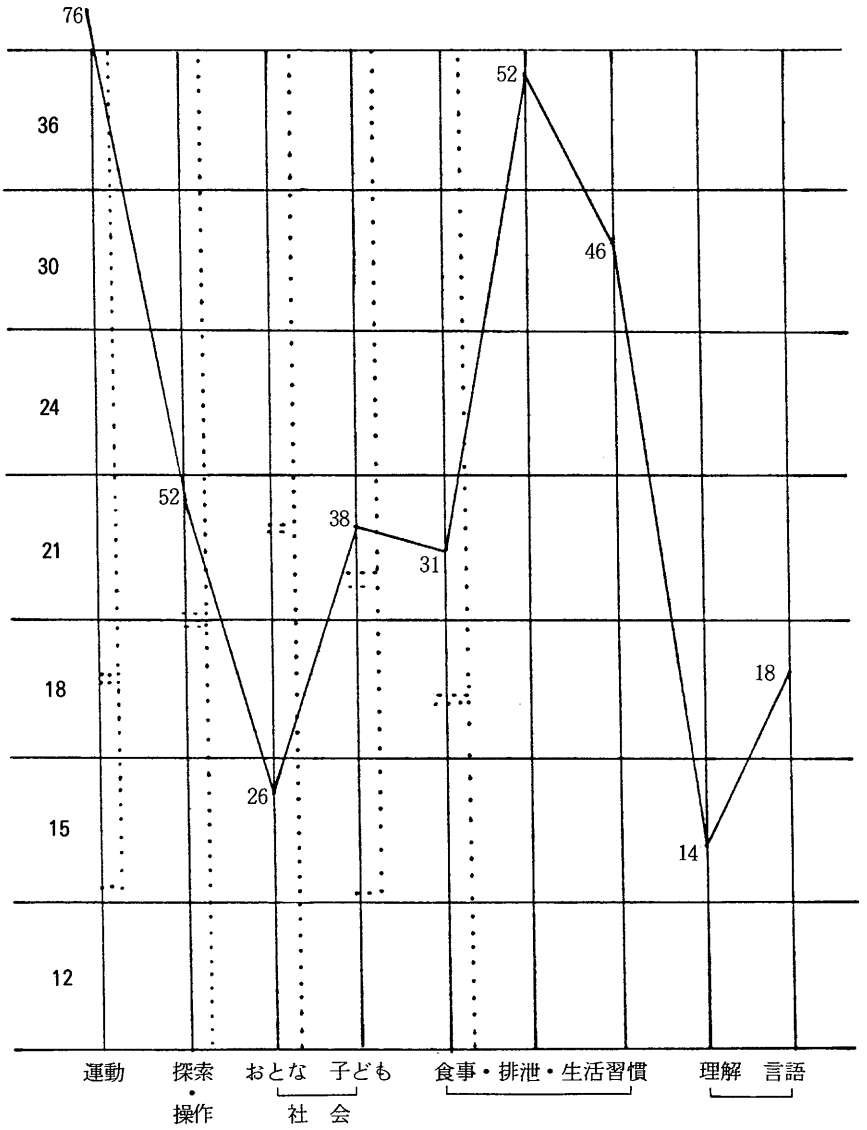
結果は図1のようであった．

一見して明らかなように，発達像全体のバランスが悪い．運動面のみがCAレベルであり，その他の領域についてはいづれも遅れが認められる．特に社会性の領域，言語の領域にその遅れが著しい．

以下，結果に基づいて若干の考察を試みると，次のように言える．

運動面に関しては，DA＝100と特に遅れは認められないが，「よういどんの合図に合わせてかけ出す」「子ども同志でふたりで走る」など，社会性の加わった項目ができない．一見問題のないようにみえる運動面についてもこのようなバランスの悪さは認められる．

排泄・生活習慣などの身辺自立に関しては不完全ながらほぼ自立できている．但しここにおいても，人との関



生活年齢	3 : 6
発達年齢	2 : 8
発達指数	76

図1　Y・U児の乳幼児精神発達検査による発達輪郭図

わりを必要とする項目は運動面同様できていない．

探索・操作では，周囲への関心や活動の芽ばえは認められるが，その対象・範囲は狭く，現実には十分機能していないようであり，今後の経験の拡大により，現時点以上の伸びは期待できるものと推察される．

対人関係をみる社会の領域は言語についでその停滞が認められる領域である．「親の顔をうかがいながらいたづらをする」「そうじの真似をする」など，人への関心を示すことは認められるが，「親とふざける」「困難にあうと助けを求める」など，人と一緒に同時的に活動すること，ないしは共感を伴うといった情動的な基盤を必要とする項目はまだ達成されていない．人への関心はあるが，それをどう実際の対人関係の場面で適用していったらよいかが，十分に学習されてきていないことが示唆される．今後の経験にゆだねられているのである．

言語の領域は最も発達が遅れていた．言語理解は14，表出は18である．言葉は対象を受け入れ，それに意味づけをしていくことが必要である．受け入れるという，まづ情動的な基盤が不十分であることがこのような結果を招いた要因と考えられる．対象に向かう構えを確立させるため，情動的，社会的な基盤を形成し，母子関係を基点とする対人行動の育成を，くり返しの経験をとうして体得していくことが必要であると考えられる．積極的，能動的な関わりが，言葉ともの，行動との間の有意味な関連を成立させることになると推察される．

乳児期よりの要求行動の乏しさと，母子関係の形成，情動的基盤が十分に形成されないまま現在に至った側面が認められる．言語の発達の遅滞に関しても，対象への注目行動を促し，母子関係に代表される対人関係が良好に営まれることが語彙の定着を促し，増加を助長するものと考えられる．現時点で物の名称の理解がはじまっていること，構音機能の成熟には問題がないこと，音の模倣の出現などから，今後語彙の増加はのぞめるものと期待できる．積極的な働きかけ，人に向かう姿勢や，対人関係に対する志向性をまづ育て，対象への関心を具体物をとうして育くみ，日常のことばに気づき，ことばの有用性に気づくようくり返し働きかけていくことが大切であると考える．

以上の結果をふまえて，対象への関心を育てること，母親との情動的な関わりが言語発達や社会的行動の発達に必要不可欠なものであることを認識し，母子関係を主体とした養育環境の見直しとともに，小集団への参加がよりよい発達的変化をもたらすことを伝える．

第４回面接（３歳９カ月）

発語数は増えているが，反復語が多い．「コッチキテ」「ハヤクカエロー」などの要求語も認められる．

簡単な指示にはほとんど従うが，マイペースなところは相変らずである．

面接室では，呼びかけると何かしていても呼んだ人の方をみて寄ってくるようになった．絵本をみての問いかけや話しかけには反復語が返ってくるだけで自発語はない．しかし話している時には相手をよく注目するようになった．

今回までの経過を辿ってみると，子どもの周囲への関心の薄さと興味の狭さが，不適切だった養育環境とで相剰効果をもたらし，言語発達の遅れと行動の偏りを生じせしめていたと言える．そこでY君自身の志向性を育てることと，環境の見直しをはかることですすめていった．発達の基盤をなす信頼関係の確立のため，受容を中心にすすめ，その結果，身体接触を求める，甘えるという行動の変容がおこり，つづいて人とコミュニケートしようとする行動の崩芽，相手を意識した行動の出現などがみられた．言語面でも指さし指示や一語文の増加，二語文の出現などが認められた．しかし反面エコラリーの定着自発語の停滞という現象もひきおこされてきている．

このようなことから，よりよい進展をはかるため，小集団への参加を試みることとした．集団への参加と，家庭での受容的対応によって本児の発達が助長されるであろう．

現在の状況

言葉の遅れた子どもの小集団グループに通園し，４～５カ月に一度来室し，経過を追っている．

グループへの通園当所は母子共に緊張感もあって，本児の状態はむしろ後退したようにもみえたが，３カ月ほど経過する頃からはグループにもなじみ，語彙数の増加，二語文の定着，興味の拡大，対人行動の確立の方向に志向していった．自己主張（「イヤダ」「ダメダ」）も徐々にみられ，感情の表現も少しづつ拡がりをみせてきている．さらに，言葉を介したやりとりもまだ必要最小限であるが認められるようになってきている．特定のものへの固着も薄れ，人と交わること，一緒に遊ぶことの方へ志向しているようである．

言語による指示にも的確に対応でき，集団への参加と

いう経験をとうし，言語はコミュニケーションの道具としての機能を果たすようになってきており，社会性も徐々に確立される方向に志向してきている．

今後は子どもの様子をみながら，経験を豊かにするとともに，無理なく多人数の集団に適応できるようすすめていくことが望ましいと考える．

おわりに

言葉の遅れの原因がすべて環境にゆだねられるものでないことは衆知のとおりである．しかしながら，言葉の発達が対人関係や社会性と相関連していることを考え合わせれば，環境の重要性は十分裏づけられるであろう．乳児期における母と子のほほえみ合いによる情緒的交流は，言語の発達を促進させる誘因となり，快の感情を伴う母子関係の円滑な営みが，言葉の成長に多大な貢献を成しているのである．

したがって発達の初期の段階でのつまづきを呈している子どもに対しては，根源にたち戻った諸調整をはかることが望まれる．

本症例における子どもの場合も，言葉の遅れを主訴としているが，その背景を探ってみると子ども側の個有の問題の他，環境の調整にゆだねられる側面もあり，複雑に問題が錯綜している．また言語に限らず，対人行動の円滑さを欠いているので，母と子の関係を調整することから徐々に人やものへのかかわりを拡げていくことをはかり，さらに集団保育への参加によって発達が促進されるよう試みてきた．

バランスの崩れた発達を呈する子どもを，短時間で均衡のとれた状態に導くことは非常に困難である．必要なだけ時間をかけ，不均衡を生み出している要因をさぐり出し，一つ一つていねいに取り除いて均衡のとれた姿へと変容していくよう，援助することがこれからも必要であろう．

子どもにとって，無理なく発達がのぞめるように配慮したいものである．

最後に，本稿をまとめるにあたり，種々配慮いただいた本学宮崎照子先生，後藤嘉余子先生に深く謝意を表する．

参考文献

藤原喜悦：子どもの発達をどうとらえるか．教育心理，33（2）pp，90～95（1985）

浜田寿美雄他：子どもの生活世界のはじまり，ミネルヴァ書房（京都），1984

堀田之：乳幼児期における育児環境と言語発達に関する研究　小児保健研究，41（3）pp，211～217（1982）

河添邦俊：子育てのみちすじ，ミネルヴァ書房（京都），1983

村井潤一：ことばの獲得・その意味について　発達2 pp，1～4（1981）

村田孝次：幼児の言語発達，培風館（東京），1975

田口恒夫他：ことばを育てる，日本放送出版協会(東京) 1979

田口恒夫他：言語発達の遅れ，日本文化科学社（東京），1981

津守真他：乳幼児精神発達診断法，大日本図書（東京），1979

上田礼子：日本版デンバー発達スクリーニング検査，医師薬出版（東京），1984